

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 鴨野 洋一郎

鴨野洋一郎の論文「フィレンツェ商人とオスマン帝国—15・16世紀におけるフィレンツェ繊維工業とオスマン帝国との経済的関係」は、中世後期におけるイタリア商人の地中海交易活動の中で、特にフィレンツェ商人とイスラム世界の超大国オスマン帝国との間の交易関係を、毛織物及び絹織物を対象として交易活動に従事した二つの商社のケースを取り上げ、未刊の経営文書を中心に諸史料を渉猟して、解明した労作である。

本論文は、「はじめに」及び「おわりに」と、本文4章から構成されている。

「はじめに」においてはまず、ヨーロッパ・地中海世界におけるイタリア商人の商業活動の全体像を概観した後、フィレンツェ商人のケースを取り上げ、フィレンツェ商人がオスマン帝国といかなる形で関わりを持つに至り、いかなる形で交易に従事したかを明らかにした。その上で、オスマン帝国との東方貿易がフィレンツェにとっていかなる意味を持っていたかを明らかにした。

第1章においては、まず、古代末期以降中世に至る時期における地中海商業において、イタリア商人がいかにして台頭してきたかを回顧し、その中で、イタリア繊維工業の発展が商業活動の発展といかなる形で関わっていたかを明らかにした。その上で、フィレンツェにおける繊維工業の発展を13世紀から16世紀まで辿り、フィレンツェ繊維工業の経営組織がいかなるものであったかを明らかにした。これらの議論を踏まえた上で、フィレンツェ繊維工業と東方貿易との関わりについての、従来の我が国及び、欧米、特にイタリアにおける研究史を回顧し、本研究についての位置づけを行った。

それに引き続いて本研究において主として使用するフィレンツェの会社組織の残した経営記録の種類及び性格について研究史を踏まえて解説を加え、とりわけその中で本研究の主要研究対象となるグワンティ家及びセッリストリー家の経営記録の特色について明らかにした。

第2章においては、両家の対オスマン貿易の具体的分析に先立ち、ビザンツ時代に遡り、フィレンツェがピサの征服をきっかけとして、ピサが対ビザンツ貿易において与えられていた特権を継承する形で東方貿易に進出した経過について明らかにした。その上で、とりわけ1453年のコンスタンティノーブル征服後において、フィレンツェが対オスマン貿易活動を活発化させたこと及びその背後の事情を明らかにし、さらに、フィレンツェ・オスマン貿易の枠組みを与えた両国間の商業協定の大綱を示した。その上で、貿易枠組みの支柱としての役割を果たしたフィレンツェ人領事の機能を史料に基づいて明らかにし、合わせて、対オスマン貿易枠組みの維持のための様々な取り組みの詳細を解明した。

第 3 章及び第 4 章において、フィレンツェの繊維工業に関わり東方貿易においても活躍したグワンティ社とセッリストーリ社を対象として、両社に関する未刊の経営文書類を中心に分析を加え、対オスマン商業活動の実態を、西欧世界内における商業活動と対比しつつ詳細に明らかとした。

第 3 章においては、まず、中世後期のフィレンツェにおける毛織物工業の発展・停滞・再発展の全体像を明らかとし、その過程におけるオスマン市場開拓の試みとその影響について論じた。そしてこれを踏まえ、15 世紀フィレンツェにおけるグワンティ家の毛織物会社を取り上げ、グワンティ家の毛織物製造業における発展とグワンティ家の家産の拡大過程を詳細に明らかとした。その上で、自社製の毛織物販売の状況に目を転じ、販売市場としてフィレンツェ市場とオスマン市場という二つの重要な市場が同時に並存していたことを史料に基づき詳細に明らかにした。その上で、販売対象の毛織物の種類について論じ、オスマン市場においては二級品としてのガルボ織が重要な販売対象となっていたことを明らかにした。オスマン市場とりわけオスマン帝国の最初の帝都でもあり、国際貿易の一大中心でもあったブルサにおけるガルボ織を中心とするグワンティ家の毛織物販売の実態を、フィレンツェにおける販売活動と対比しながら明らかとした。さらに、ブルサ市場における色彩別の需要構造の詳細も明らかとした。また、ブルサにおける販売の諸費用について代理人帳簿を中心とする経営文書に基づいて詳細に明らかとし、ブルサにおける実際の代金徴収過程についての詳細も国際的にも初めて解明した。

第 4 章においては、金箔会社として出発したが、すでに 1500 年頃には絹織物製造に特化するに至っていたセッリストーリ金箔会社を中心的対象として取り上げ、まず、15 世紀におけるフィレンツェの絹織物工業の状況と国際市場との関わりについて論じた。これを踏まえ、セッリストーリ金箔会社の絹織物製造及び販売の実態について、未刊経営文書類に基づき、国際的にも初めて詳細を解明した。さらに、会計帳簿に基づき、イギリスにおける販売活動と対比しながらオスマン市場における販売の費用及び利益についても詳細を明らかとした。

そして「おわりに」においては、両会社共に、オスマン市場との貿易活動において、巨利ではないが確実な利益を上げており、その経済活動はオスマン帝国の開放的帝国体制によって支えられていたことに論及した。ただ、高リスクであるにも関わらず、必ずしも高利益とは言えないオスマン市場貿易にかなりの比重で関わった真の理由が何であったかについては、今後の一層の研究の課題となることに言及して論を閉じている。

本論文は、フィレンツェの古文書館に収蔵される未刊の膨大な経営文書の博搜に基づいて、本邦・欧米のみならずイタリア本国においてもいくつかの先駆的な事例を除けば従来必ずしも十分に解明されていなかったオスマン市場を中心とするフィレンツェの対東方貿易の実態を詳細に明らかとした国際水準に達する労作である。とりわけ、毛織物商業については、ガルボ織を中心にフィレンツェ市場とオスマン市場という二つの市場が並存してこれを支えていたという問題提起を国際的にも初めて明確に行った点で、学説史上独自の

価値を有する。絹織物商業については、イギリス市場とオスマン市場とでは取り扱い品目が異なっており、とりわけオスマン市場においては、宮廷が最も重要な販売対象であり、最高級の金糸織り製品が多量に販売されていたことを明らかとし、東方貿易史のみならず東西文化交流史にとっても重要な指摘を行っている。

とはいえ、本論文は、フィレンツェ経営文書の精査に基づく極めて実証的な労作ではあるが、より巨視的な東方貿易史全体の枠組みの中における位置づけがなお不十分であるきらいがある。また、二つの商社のみを対象として取り上げており、フィレンツェさらにはフィレンツェ以外の諸国の商社と比較して、この二つの商社の持つ特殊性と他の諸商社とも共有する共通性が明らかとされていない。さらに、二つの商社に限っても、各商社の経済活動の全体像が示されていないために、対オスマン貿易の両商社の全体的活動の中における相対的な位置づけと意味が必ずしも明らかになっていない。

これらの問題点を孕みながらも、本論文は、未刊の経営史料の精査に基づき、従来十分に解明されてこなかったフィレンツェの対東方貿易の構造の一端を詳細に明らかとした点で、国際的にも重要な学術的貢献といえることができる。

以上、本審査委員会は、本論文は、博士（学術）の学位を授与するのに十分値するものであることを認定した。